

伊沢修二『日清字音鑑』における ng韻尾の表記方法について

張 照 旭

1. 『日清字音鑑』とは

『日清字音鑑』は日本漢字音によって中国語の発音が引けるように編纂された中国語の発音一覧表である。初版は明治28年(1895)6月に発行された。緒言9頁、索引目録3頁、本文89頁、正誤表3頁からなっている。

本文には「支那官話」即ち当時の北京語の口語によく用いられる漢字を4123個収めている。これら漢字は縦に四声、横に五十音ア段イ段ウ段エ段オ段の順に日本漢字音で配列されている。それに対して、「韻鏡」も中国語の発音一覧表で、横には声母、縦には韻部・四声によって配列されている。また、本居宣長の『字音假字用格』には、漢字は五十音順に日本漢字音で配列されている。そういう意味で、『日清字音鑑』は『韻鏡』や本居宣長の『字音假字用格』の体裁と似ている。

中国語の発音は漢字の左にウェード式ローマ字綴り、右に片仮名で表記される。本稿ではその片仮名を「中国語仮名表記」と呼ぶことにする。

編纂意図については、『樂石自伝教界周遊前記』には

「自分が學ぶにも或は清國に行く人の為にも、支那語の發音法が解らなくては困るからして、視話法の原理を應用して『日清字音鑑』といふ書物を著し」

とある。朱鵬(2001)によれば、当時の対清外交(台湾を含む)を踏まえて考えるべきと主張している。本書の成立直後に、著者の伊沢修二は台湾に赴いて台湾総督府民政局学務部長として学務の事務に着手していた。したがって、台湾行政との意志疎通の手段として『日清字音鑑』を編纂したのではないかと思われる。

本文の1頁目には「伊沢修二・大矢透同著 張滋訪聞」と記されている。

伊沢修二(1851—1917)は、明治・大正期の教育家で教科書編纂、国家教育運動、師範教育、音楽教育、体育教育、盲啞教育、台湾をはじめとする植民地教育および中国語の言語研究、吃音矯正事業等に於いて先駆的業績を残した(上沼八郎1979)。「日清字音鑑」を除いて『視話応用・清国官話韻鏡音字解説書』・『同文新字典』・『支那語正音練習書』・『支那語正音發微』・『視話応用・支那語正音韻鏡』・『視話応用・支那語正音法説明』などの中国語関係の

本を世に残している（埋橋徳良2000）。

大矢透（1850—1928）は明治・大正時代の国語国文学者で、大正5年（1916）帝国学士院恩賜賞である。文部省国語調査委員として、仮名字体の歴史的変遷の研究を中心とし、古訓点、万葉仮名、五十音図、いろは歌、『韻鏡』の研究に業績を残している。著作は『仮名遣及仮名字体沿革史料』『仮名の研究』『仮名源流考』『韻鏡考』などである（東京帝国大学国文学研究室1928）。

張滋昉（1839—1900）は明治時代の中国語教育の鼻祖とされ、中国語を教えると同時に、近代日本における最初のアジア主義組織である興亜会を支え、日本の政治家や文人らと幅広く付き合うなどして、明治時代の中日連携事業に積極的な貢献を成した人物である（玉宝平2009）。

2. 先行研究

六角恒広（1959）は『日清字音鑑』は視話法を基礎にして、日本語の仮名を主体としその仮名に若干の記号を加えて表記したと述べた。村上嘉英（1966）は片仮名表記は視話法を応用して北京語音を表記したものであると述べた。また、記号「ク」は「新造の符号カナ」と指摘した。埋橋徳良（2000）は伊沢は従来行われていた仮名方式とウェード式ローマ字綴りを併用しているが、仮名方式もローマ字方式も中国語特有の音韻を的確に表すことはできないとして独自の工夫を加えたと述べた。朱鵬（2001）は片仮名表記は視話文字と直接的な関係がなく、「視話法ノ原理」に照らした程度にとどまると指摘した。また、表記法においては完全な仮名の羅列ではなく、さらに記号・合字の新作を通してより適切に表現しようとしている点を評価した。

本稿では、以上の先行研究に留意したうえで、村上嘉英（1966）が指摘したng韻尾の表記「ク」を検討していきたい。

3. ng韻尾の表記の実態

『日清字音鑑』には、n韻尾のある音節は874個で、ng韻尾のある音節は694個ある。

n韻尾は、すべて「fan 返 ファン」のように撥音「ン」で表記される。一方、ng韻尾は、「lêng 陵 ルエオン」・「fêng 縫 フウオン」の2例を除いて、すべて「fang 芳 ファク」のように記号「ク」で表記される。『日清字音鑑』はn韻尾を撥音「ン」、ng韻尾を記号「ク」で整然と表記し分けると言える。

これはこの時代においてどのように位置づけられるだろうか。次の〔表1〕は明治期におけるn韻尾・ng韻尾の中国語仮名表記の実態である。

〔表1〕明治期におけるn韻尾・ng韻尾の中国語仮名表記の実態

書名	編著者	発行年月	発行所(所)	n	ng
英語会話独案内	田中正程ら	明治18年7月	昇栄堂	ン	ン
英和支那語学自在	川崎春	明治18年8月	岩崎益太郎	ン	ン
日漢英語會話	兵大五郎、鄭永邦	明治21年12月	鄭永堂	ヌ	ン
支那語独習書・第一編	倉宿近	明治22年5月	支那語独習学校	ン	ン
重編支那語彙・支那官話部(再版)	広部精	明治25年5月	青山堂書房	ン	ン
穂歌亞細亞語彙・支那官話部(再版)	広部精	明治25年6月	青山堂書房	ン	ン
日清会話自在	沼田正宜	明治26年6月	法木書店	ン	ン
実用支那語・正篇	中島謙吉	明治27年7月	高武学校編纂部	ン	ン
支那語便覧・第一	加藤彦彦	明治27年8月	松沢江三	ン	ン
日清会話	参謀本部	明治27年8月	参謀本部	ヌ	ン
兵要支那語	近衛歩兵第1旅団	明治27年8月	東邦書院	ン	ン
兵要支那語(増訂2版)	近衛歩兵第1旅団	明治27年8月	東邦書院	ン	ン
清国事情探検録	宮内塔三郎	明治27年9月	東陽堂	ン	ン
独習日清対話捷徑	尾邦貞(繪形城)	明治27年9月	鎌鈴堂	ン	ン
兵要要語・日清会話	神代謙身	明治27年11月	神代謙身	ン	ン
字類須知	松永清	明治28年1月	岸田吟香	ン	ン
軍用商業会話自在・支那語独案内	泉文山人	明治28年4月	柏原政次郎	ン	ン
漢語問答集	円山真逸	明治28年5月	円山真逸	ン	ン
支那語自在	豊岡義孝	明治28年5月	獅子吼会	ン	ン
支那南部会話	小倉鶴太、金沢保風	明治28年9月	博文館	ン	ン
支那音速知	額廷彦	明治32年6月	寶篋書院	ン	ヌ
支那語独習書	宮島大八	明治33年9月	寶篋書院	ン	ヌ
支那語学校講義録(第1号~第7号)	前田清哉	明治34年5月~明治35年2月	寶篋書院	ン	ヌ
支那補助語用法	青物舞恒	明治35年2月	文求堂	ン	ヌ
清語教科書・並録編(増訂版)	西島良爾	明治35年7月	石塚猪男	ヌ	ン
支那語自在	金井保三	明治35年9月	勤学会	ヌ	ン
和文対照・支那書翰文	中島庄太郎	明治36年1月	飢寒堂	ヌ	ン
日清会話編	松永清	明治36年5月	同文社	ン	ン
新編中略清語教科書	西島良爾、林達道	明治37年3月	石塚松雲堂	ン	ヌ
実用日清会話独修	鈴木雲峰	明治37年5月	修学会	ヌ	ン
北京官話・支那語捷徑	足立忠八郎	明治37年5月	金刺芳流堂	ヌ	ン
清語会話速成	東洋学会	明治37年7月	又間精齋堂	ヌ	ン
日清会話独習	山深辰藏	明治37年7月	東雲堂	ヌ	ン
北京官話・実用日清会話	足立忠八郎	明治37年8月	金刺芳流堂	ヌ	ン
日清露会話	柏谷元、平井平三	明治37年9月	文尼堂	ヌ	ン
新編支那語独修	三原好太郎	明治38年4月	岡崎園	ヌ	ン
対訳清語活法	來原廉助	明治38年6月	三省堂	ヌ	ン
日漢辞彙	石山福治	明治38年6月	南江堂、文求堂	ヌ	ン
日清会話	柏谷元	明治38年6月	文尼堂	ヌ	ン
日華会話彙要	平谷道知	明治38年7月	岡崎園書店	ン	ヌ
日清会話・語目類集	金島吾水	明治38年7月	松雲堂	ン	ン
実用日清会話	湯飯兼政	明治38年9月	石塚猪男	ヌ	ン
注釈・日清語学金針	高紹慶等	明治38年9月	日清語学会	ン	ン
日清会話入門	西島良爾	明治38年9月	代々木商會	ン	ヌ
清語文典	借原健雄	明治38年11月	青木嵩山堂	ン	ン
清語新会話	山崎久太郎(桃洲)	明治39年2月	青木嵩山堂	ン	ン
支那語之助	大久保家道	明治39年4月	支那語学会	ン	ン
清語正規	清語学会速成社	明治39年4月	文求堂	ヌ	ン
日暮時文辞林	中島錦一郎、杉房之助	明治39年6月	東亞公司	ン	ン
日清習語異同弁	中島錦一郎	明治39年6月	東亞公司	ン	ン
北京官話・日清会話捷徑	甲斐清	明治39年7月	弘成館	ヌ	ン
日華語学辞林	井上翠	明治39年10月	東亞公司	ヌ	ン
最新清語捷徑	西島良爾	明治39年12月	青木嵩山堂	ヌ	ン
初步支那語独修書	原口新吉	明治39、39年	広報社	ヌ	ン
日清英会話	谷原孝太郎	明治40年6月	実業之日本社	ヌ	ン
支那語動詞形變詞用法	皆川秀孝	明治41年1月	文求堂	ン	ヌ
清語講義録(第1期第1号)	皆川秀孝	明治41年8月	東亜学会	ヌ	ン
北京官話・日清商業会話	足立忠八郎	明治42年2月	金刺芳流堂	ヌ	ン
支那語の講義	津城原夫	明治43年6月	小林又七支店	ヌ	ン
四民実用清語集・附觀語用法	宇西次郎	明治43年8月	大阪櫻号	ヌ	ン
日清英露四語合璧	兵大五郎、鄭永邦	明治43年8月	島田太四郎	ヌ	ン
大日本実業学会商科第2期講義・支那語	銀浜清、林久昌	不詳	大日本実業学会	ン	ン

〔表1〕を見ると、n韻尾・ng韻尾の中国語仮名表記は3種類に分かれる。即ち、n韻尾は「ン」、ng韻尾は「ン」、n韻尾は「ヌ」、ng韻尾は「ン」、n韻尾は「ン」、ng韻尾は「ヌ」である。その中において『日清字音鑑』のように記号「ク」でng韻尾を表記するのは珍しいことがわかる。それでは、『日清字音鑑』に見られる記号「ク」は何であろうか。

4. 記号「ク」の意味

『日清字音鑑』の「緒言」には次のように述べている。

「但「カ」(關東ノカ行)ノ原音ニ屬スルモノ、僅ニ存スルアリ。又其行中ノ「ク」ハ、屢々語尾ニ顯ハル、モノニシテ、殆ド「ン」ニ同ジケレド、唯其舌頭ヲ、上顎ニ壓付スルコトナキヲ以テ、其音ノ輕キヲ異ナレリトスルモノナリ。」

即ち、ng韻尾の表記「ク」は「關東ノカ行」の一つである。村上嘉英(1966)は記号「ク」は「新造の符号カナ」と指摘した。ところが、橋本進吉(1949)には「明治以降、特に發音を明示する場合にnga ngi ngu nge ngoをカ`キ`ク`ケ`コ`またはカ`キ`ク`ケ`コ`で示すことがある。」という記述がある。また、川本栄一郎(1990)は幕末から明治にかけてガ行鼻濁音表記の系譜を調査している。川本栄一郎(1990)を整理すると、次の〔表2〕のようになる。

〔表2〕 ガ行鼻濁音表記の系譜

発行年	書名	編著者名	表記(例)
安政2年~安政3年	〔三浦命助日記〕	三浦命助	カ`
安政6年~万延2年	〔獄中記〕	三浦命助	カ`
明治5年	〔単語篇〕	文部省	カ`
明治6年	〔単語篇〕	石川県学校	カ`
明治7年	〔絵入単語編〕	橘慎一郎	カ`
明治7年	〔假名附単語篇〕	六明堂板	カ`
明治8年	〔小学懸図解〕	吉川初次	カ`
明治23年	〔中等教育・日本文典全〕	落合直文ほか	カ`
明治30年	〔日本文典大綱〕	岡倉由三郎	カ`
明治34年	〔日本俗語文典〕	金井保三	カ`
明治34年	〔国語科教授用・発音教授法〕	高橋龍雄	カ`
明治35年	〔応用官語学十回講話〕	岡倉由三郎	カ`
明治35年	〔官語学講話〕	保科孝一	カ`
明治38年	〔音韻調査報告書〕	国語調査委員会	カ`
明治39年	〔日本口語文典〕	鈴木暢幸	カ`
明治42年	〔国語学概論〕	亀田次郎	カ`
明治43年	〔国語学精義〕	保科孝一	カ`
明治45年	〔新国定読本適用・実際口語法〕	橋本文寿	カ`

〔表2〕を見ると、幕末からガ行鼻濁音は鼻音要素を表すため、独自の表記が成立したことがわかる。その表記はカ行音の右肩に「・」または「 \cdot 」を加えたのである。川本栄一郎(1990)はカ行音の右肩に「 \cdot 」という系統は個人名を冠した文獻に多く見られるのに対して、カ行音の右肩に「 \cdot 」という系統は公的機関の文獻に多いという相違が見られるので、私的なものに対する公的なものといった違いや学統の違いなどの事情による可能性があると指摘した。

『日清字音鑑』の編著者の伊沢修二は学校長・文部省編輯局長・台湾総督府学務部長・貴族院議員を歴任していたため、公的な性格を持っていると言える。したがって、『日清字音鑑』に見られる記号「ク \cdot 」は「新造の符号カナ」ではなく、「グ」の鼻濁音の表記なのではなからうか。それでは、なぜ『日清字音鑑』の編著者は「グ」の鼻濁音「ク \cdot 」でng韻尾を表記したのであろうか。

5. 「ク \cdot 」でng韻尾を表記する理由

5.1. 本居宣長『地名字音転用例』について

本居宣長『地名字音転用例』（寛政12年、1800）は上代文獻において中国語のng韻尾は次の用例のようにガ行音で表記していることを発見した。

さがむ（相模）さがらか（相楽）かがみ（香美）いかが（伊香）かがと（香止）
 おたぎ（愛宕）たぎの（宕野）よろぎ（餘綾）くらぎ（久良）みなぎ（美狭）
 たぎま（當麻）ふたぎ（布當）うまぐた（望多）かぐやま（香山）
 いかご（伊香）あたご（愛宕）

5.2. 明治期におけるng韻尾の認識

〔表1〕に挙げた中国語関係文獻にはng韻尾について記述しているものがある。これらはそれぞれ①—③のように記述している。

- ①『日漢英語言合璧』（明治21年12月） 漢音ニ寛窄ノ別アリ。之ヲ區別スルニ。我（ヌ）ハ即チ窄音ニシテ（ン）ハ即チ寛音ナリ。例ヘバ壺ハ窄音ニシテ。chin猶ホ英字母ノ（n）ニ終ルガ如シ。又輕ハ寛音ニシテching猶ホ英音ノ綴ニ於テ（ng）ノ如ク。（ン）ノ音直チニ鼻端ヨリ出ヅ。恰カモ（ク）ノ半濁音ニ近シ。
- ②『日清会話自在』（明治26年6月） 音に濁窄の別あり濁音とは口を廣くして發すへき音にして窄音とは口を搾りて出すへき音なり此濁窄を辨別するは甚た容易なる便方あり。
- ③『日清会話』（明治27年8月） （ヌ）ハ窄音ニシテ英音ノエヌニ終ルカ如ク狭窄ニシテ鼻音ヲ帯ヒサル者。（ン）ハ濁音ニシテ英音綴ノngノ如ク直ニ鼻端ヨリ出ツ恰モ（グ）音ニ近ク輕ク發ス。

- ④【兵要支那語】(明治27年8月) 音末の「ン」は窄音にして、鼻音を帯びたるもの、即ち金(チンhin)三(サンsan)の如き是なり。東(トングtong)洋(ヤングyang)の如き、濁音にして稍鼻音を帯び、自然音末に「ン^ッ」を含むものは、殊更に「グ」の假名を附せず、其轉訛を避くるなり。
- ⑤【兵要支那語】(増訂2版)(明治27年8月) 記述は④【兵要支那語】と一緒である。
- ⑥【支那語独習書】(明治33年9月) 廣音ハ多ク鼻音ニシテ音尾ニ著ルシクヌノ響ヲ有スルモノ、即チ東(トヌ)(筆者略)等ノ音是ナリ。窄音トハ、語尾ニ清涼ナルンノ響ヲ有スルモノニシテ、三(サン)(筆者略)等ノ音是ナリ。廣窄二音ハ互ニ誤リ易シ。注意スベシ。
- ⑦【支那語学校講義録】(第1号~第7号)(明治34年5月~明治35年2月) 音尾ノ(ン)と響キ、ソノ鼻ヲ通シテ發スル者ヲ寬音と稱ス、鼻ヲ通ゼズシテ、口ヲ開ヒテ發スル者ヲ窄音トス、寬音ハ太ク、窄音ハ滑シ、寬音ハ下ニ(ヌ)ヲ以テ之ヲ表シ、窄音ハ(ン)ヲ以テ之ヲ表ス。
- ⑧【清語教科書・並続編】(増訂版)(明治35年7月) 窄音ハ音ノ窄狹ニシテ鼻音ヲ帯ビザルモノヲ云フ清語ノ音末ニ(ン)音アリテ我邦音ニモ亦タ(ン)音アルモノハ均ク窄音ニ屬ス本書假字語尾ニ(ヌ)ヲ付スルモノ之レナリ英語發音ノ(n)ニ終ルカ如シ例ヘハ(官コヲヌ)(筆者略)等ノ如シ。濁音ハ音ノ寬濁ニシテ鼻音ヲ帯ブルモノヲ云フ清語ノ音末ニ(ン)音アリテ我邦音ニ有セザルモノハ概濁音ニ屬ス本書假字語尾ニ(ン)ヲ付スルモノ之ナリ英語發音ノ(ng)ニ終ルカ如シ例ヘハ(昂アン)(筆者略)等ノ如シ。
- ⑨【実用日清会話独修】(明治37年5月) 本書中所載の(ヌ)の音は們(メヌmen)の英音語尾のエヌnの如く、狭いあまり鼻管に觸れざるものをいふ。又(ン)の音は上(シヤンshang)の如く、英音のngの様に鼻の端から發してgを軽い音で發するのである。
- ⑩【北京官話・支那語学捷徑】(明治37年5月) 窄音ハ音尾ニ於テ我ガ(ヌ)ニ終ル音ナリ、即チ英字母ノ(n)ノ如シ、(民 ミヌ min²)(筆者略)等ナリ。寬音ハ鼻音ニ終ルモノニシテ、我ガ(ン)ニ同ジク、英字綴リノ(ng)ノ如シ、即チ(名 ミン ming²)(筆者略)等トス。
- ⑪【北京官話・実用日清会話】(明治37年8月) 窄音即チ我音ノ(ヌ)英字綴リノ(n)ナリ(民 ミヌ)(面 ミエヌ)ノ如シ。寬音即チ我音ノ(ン)英字綴リノ(ng)ノ如ク鼻音ニ終ルモノ(名 ミン)(章 チヤン)ノ如シ。
- ⑫【日清露会話】(明治37年9月) 寬音トハ語尾(ン)ニ終リ英語ノngノ如ク發音ス即チ稍々鼻音ヲ帯ビテ終ルモノニシテ(ン)ヲ以テ示セリ我ガ邦音ニテ語尾ニ(ン)ノ字ノ附カザルモノ即チ(東 トン)(筆者略)ノ如キハ皆ナ之ニ屬スト知りテ可ナリ。窄音ト

ハ語尾英語ノ (n) ニテ終ルモノト一様ニシテ (ヌ) ヲ以テ之ヲ示ス我ガ邦音ニテ語尾ニ (ヌ) 字ノ附クモノ即チ (近 チヌ) (筆者略) ノ如キ皆ナ之レニ屬スト知りテ可ナリ。

- ⑬『対訳清語活法』(明治38年6月) 羅馬字のnに終る語音には之に附するにヌの假名を以てす。例せば、山 (shan) をシヤヌ、(筆者略) とせるが如し。羅馬字のngに終るものにはン字を付す。例せば上 (shang) をシヤン、(筆者略) とせる等の如し。
- ⑭『日清會話』(明治38年6月) 記述は⑫『日清露會話』と一籍である。
- ⑮『日華會話筌要』(明治38年7月) 音尾 (ン) ニ終ル者ハ窄音ニシテ鼻音ヲ帶ビザルモノ。音尾 (ヌ) ニ終ル者ハ濁音ニシテ鼻音ヲ帶ブル者。
- ⑯『日清會話・語言類集』(明治38年7月) 窄音ハ鼻音ヲ帶ビザルモノヲ云フ邦語ノ音末ニ (ン) 音ヲ有シ清語ニモ亦 (ン) 音アルモノヲ云フ例ヘバ (安 アン an) (筆者略) 等ノ如シ。濁音ハ音ノ鼻音ヲ帶ブルモノヲ云フ清語ノ音末ニ (ン) 音ヲ有シテ邦音ニ有セザルモノハ概シテ濁音ニ屬ス例ヘバ (亮 リヤン liang) (筆者略) 等ノ如ク (ン) ノ音直チニ鼻端ヨリ出ゾル=其ノ音末ハ恰カモ (ク) ノ半濁音ニ近シ。
- ⑰『注釈・日清語学金針』(明治38年9月) 房 (フワン) 房の音尾は、我が國語の短刀 (タントー)、山水 (サンスイ)、天地 (テンチ) 等の語に於ける「ン」の音と同じく、口を開き、舌根にて支へたる音を鼻腔に漏すによりて生ずる音にして、英語の (ng) の音に當る。飯 (フワヌ) 飯の音尾は、我が國語の案内 (アナナイ)、女 (オヌナ)、旦那 (ダヌナ) などの語に於ける「ヌ」の音と同じく舌頭を上腭に押し付けて支へたる音を鼻腔に漏すによりて生ず、即ち英語の (n) の音に當る。上記「ヌ」の音字は國語の主 (ヌシ)、沼 (ヌマ) 等の語に於ける「ヌ」の音と紛ひやすきを以て本替中にありては何れも「ン」の音字を以て之を表することとせり。
- ⑱『清語正規』(明治39年4月) 寛音とは十分に喉を開き「ン」の音をば鼻腔を通して音響太く發する音を云ひ窄音とは先づ「ン」を發し其未だ鼻腔に脱げざる中急に舌を上顎に當て音尾をば「ヌ」と清んで結ぶ音を云ふ。(筆者略) 因て發音の振り假名は寛音は「ン」を以て示し窄音は「ヌ」を以て之を示す。
- ⑲『日華時文辭林』(明治39年6月) 記述は⑳『注釈・日清語学金針』と一籍である。
- ㉑『北京官話・日清會話捷徑』(明治39年7月) 窄音は發音狹窄にして語尾に清楚なる「ン」の響を有するものを云ふ。例へば三 (サヌ) (筆者略) 等の如し。即清語の音尾に「ン」音ありて我が邦音にも亦「ン」音あるものはなり。而して英語發音にては「n」に終るものとす。濁音は發音寛濁にして多く鼻音を帶ぶるものを云ふ。例へば方 (フアン) (筆者略) 等の如し。即清語の音尾に「ン」音ありて我が邦音には「ン」音なきものはなり。而して英語發音にては (ng) に終るものとす。

- ㉑『日華語学辞林』（明治39年10月） 又音尾ノヌハ窄音ンハ寛音ヲ表ハスモノナリ。
- ㉒『初歩支那語独修書』（明治38、39年） 寛音ハ充分ニ喉ヲ開キ「ん」ノ音ヲ少シモ他ニ響カセズ鼻ヲ通ジテ音響太ク發ス可シ。窄音ハ最始「ん」ノ音ヲ發シ鼻ニ抜ケザル内、急ニ舌ヲ上顎ニ當テ「ぬ」ト音尾ヲ消ク結ブ可シ。
- ㉓『日清英会話』（明治40年6月） 窄音は音の窄狭にして鼻音を帯びず清語及び邦音共に音末に「ン」音ある者は均しく此音に屬して英語發音末「n」に終るが如し 例、(官クオアン)（筆者略）。濁音は音の寛濁にして鼻音を帯び清語の音末に「ン」音あり我が邦音に「ン」音を有せざる者は概して此音に屬し英音語尾に「ng」を附する者 例、(上シヤン)（筆者略）。
- ㉔『清語講義録』（第1期第1号）（明治41年8月） 寛音は音尾の鼻にかゝる音で發音すると同時に口を結んで音尾を鼻より洩らすのである。窄音は音尾の鼻にかゝらざる音で發音と同時に口を少し開くのである。
- ㉕『北京官話・日清商業会話』（明治42年2月） 寛音ハ語尾ヲ鼻音ニ發スルモノ即チ「ン」ニ終ル發音トス章(チャン)（筆者略）等ナリ。窄音ハ語尾鼻端ニ響カズ「ヌ」ニ終ルモノ即チ三(サヌ)（筆者略）ノ如シ。
- ㉖『日清英露四語合璧』（明治43年8月） 記述は①『日漢英語言合璧』と一緒にである。

上の記述は次の(一)(二)(三)のようにまとめられる。

- (一) ⑨・⑬・⑰・⑱を除いてn韻尾を「窄音」、ng韻尾を「寛音」または「濁音」と記述される。
- (二) ①・③・④・⑤・⑬・⑳はng韻尾の發音が日本語「クの半濁音」または「グ」の音に近いと記述される。
- (三) ①・③・⑧・⑨・⑩・⑪・⑫・⑭・⑰・⑱・㉑・㉒・㉓はng韻尾の發音が英語ngの音に近いと記述される。

さらに(三)を一步進んで考えてみる。英語ngは日本語で普通「グ」で表記され、中国語ng韻尾は英語ngの音に近いと考えれば、「グ」に近い表記で表しても妥当であろうと考えられる。すると、(三)を(二)に代入してみると、ng韻尾を「グ」に近い表記で表すという発想は広い範囲に分布していたのではなからうか。

6. 終わりに

これまで述べてきたことをまとめて示すと、次のようになる。

『日清字音鑑』は記号「ク」で中国語のng韻尾を表記する。これは珍しく注目される。

ガ行鼻濁音は東日本に顕著だったためこれを明示すべく、幕末から独自の表記が成立した。その表記はカ行音の右肩に「・」または「ゝ」を加えたのである。記号「ク」は「新造の符号カナ」ではなく、「グ」の鼻濁音の表記である。

江戸中期の国学者本居宣長は著『地名字音転用例』において、上代文献における中国語のng韻尾がガ行音で表記されることを発見した。明治期に入って、ng韻尾を「グ」に近い表記で表そうとする発想はある程度の範囲に広がっている。したがって『日清字音鑑』に見られる「グ」の鼻濁音「ク」でng韻尾を表すという表記方法は独創によるものではなく、江戸中期からの一連の発想の中に位置づけられるべきであろうと思われる。

参考文献

- 伊沢修二君還暦祝賀会（1912）『楽石自伝教界周遊前記』伊沢修二君還暦祝賀会
榎橋徳良（2000）『日中言語文化交流の先駆者—太宰春台、阪本天山、伊沢修二の華音研究』白帝社
王宝平（2009）『明治時代に来日した文人張滋防の基礎的研究』『アジア文化交流研究』第4号 関西大学アジア文化交流研究センター
上沼八郎（1979）「伊沢修二」の項目『国史大辞典』第1巻 吉川弘文館
川本栄一郎（1990）『幕末の『獄中記』に見られるガ行鼻音表記とその系譜』『国語論究』第2集 明治書院
朱鵬（2001）「伊沢修二の漢語研究（上）」『天理大学学報』第196輯 天理大学
東京帝国大学国文学研究室（1928）「大槻大矢両博士記念」『国語と国文学』第5巻第7号 至文堂
橋本進吉（1949）『文字及び假名遣の研究』岩波書店
村上嘉英（1966）「日本人の台湾における閩南語研究」『日本文化』第45号 天理大学
六角恒広（1959）「伊沢修二とその中国語研究」『早稲田商学』138号 早稲田商學同友會

附記

本稿は日本語学会中国四国支那2012年度大会（2012年10月13日 於徳島大学）の口頭発表「『日清字音鑑』の中国語仮名表記について」に基づく。発表に際し、貴重な意見を賜った。心より感謝申し上げる。

（ちょう しょうきょく 岡山大学大学院社会文化科学研究科）